



2010年9月27日（月）  
株式会社ボーネルンド

～ 子どもの運動や遊びに関する母親の意識調査 ～  
**子どもの成長へ「運動や遊びが重要」母親たちの理解高く**  
「遊びの三間」保障されていない現状も浮き彫りに

子どもの健全な成長に寄与することを目的に教育遊具の輸入・開発・販売を行う株式会社ボーネルンド（本社：東京都渋谷区、代表取締役社長：中西弘子）では、山梨大学人間科学部准教授 中村和彦先生に調査内容の検討と分析をいただき、9月上旬に3歳から8歳のお子様を末子に持つ全国の母親400名を対象に、「子どもの運動や遊びに関する母親の意識」に関するインターネット調査を実施いたしました。

毎年「体育の日」に文部科学省が公表する「体力・運動能力調査報告書」をみると、我が国の子どもは1985年前後から体力や運動能力が低下していることが明らかになっています。その背景には、子どもが発達段階に見合った運動や遊びが経験できていないことが指摘されています。そこで今回、「子どもの運動や遊びに関する母親の意識」をとらえるために、「遊びとコミュニケーションや学力との関係性」「遊びの三間の充足度」「運動能力を高めるための経験」「子どもの成長への期待度」「望ましいスポーツ経験」などに関して調査しました。

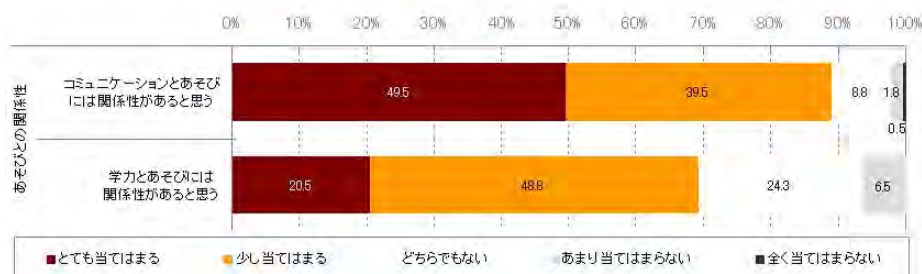
【 調査概要 】

調査方法	インターネット調査
調査地域	全国
調査対象	3歳から8歳のお子様を末子に持つ全国の20代から40代の母親
有効回答数	合計400サンプル
調査時期	2010年9月上旬

【 調査結果 】

～ 遊びはコミュニケーションや学力と関係がある ～

Q. 子どもの遊びについて、以下の事柄はどのくらいあてはまると感じますか。一番下のお子様のことを思い浮かべてお答えください。



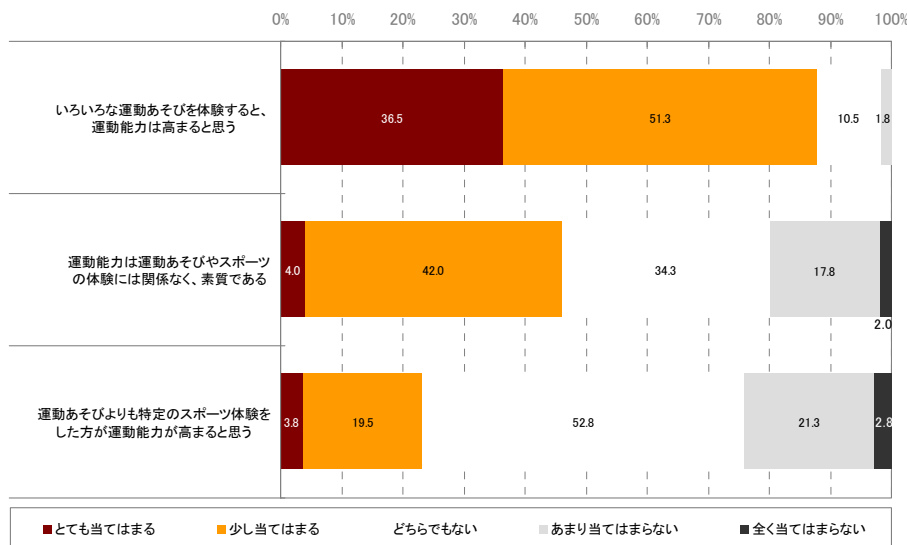
多くの母親が、遊びはコミュニケーションと学力と関係があると考えていました。しかし、コミュニケーション

ヨンと遊びの関係性について「どちらでもない」、「関係ない」と考えている母親が 11,1%、同様に学力と遊びの関係性について「どちらでもない」、「関係ない」と考えている母親が 30,8%存在することも分かりました。



遊びを成立させる要素である「時間・空間・仲間」の三つに関しては、自分が子どもの頃と比べて現在の子どもが時間、場所（空間）、仲間ともに充足されていないと感じている母親が多数を占めましたが、一方で現在の子どもの方が時間が充足されていると感じている母親は8,8%、場所（空間）が充足されていると感じている母親は11,5%、仲間が充足されていると感じている母親は8,3%いることも分かりました。

Q. 子どもの運動について、以下の事柄はどのくらいあてはまるとお考えですか。一番下のお子様のことを思い浮かべてお答えください。

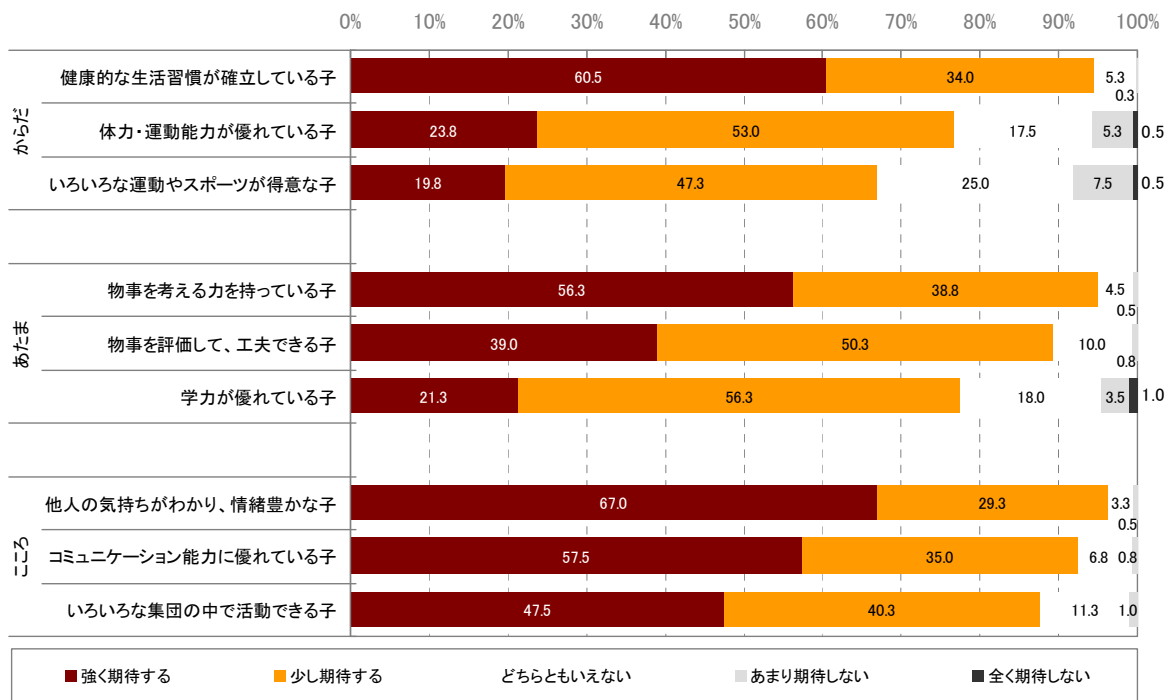


運動遊びを経験すると運動能力が高まると考える母親は87,8%に上ることが分かりました。その一方、12,3%の母親は、運動遊びと運動能力は関係性がないと考えていることも分かりました。

また、運動能力は素質で決まると考えている母親の割合が46,0%に上ることが分かりました。

運動遊びより特定のスポーツを経験したほうが運動能力は高まると考える母親が23,3%存在する一方、特定のスポーツより運動遊びをしたほうが運動能力は高まると考えている母親も、24,1%存在することが分かりました。また、どちらでもないと考えている母親の割合は52,8%に上りました。

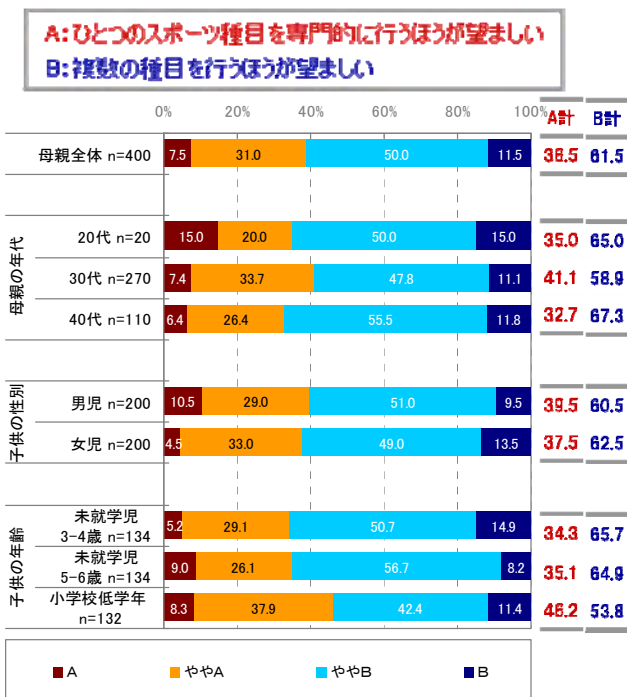
Q. 一番下のお子様が15歳くらいになった時、どのような子になって欲しいと期待しますか。次にあげる項目について、あなたがお子様に期待する程度を、教えてください。



子どもの成長への期待度については、母親の年代で多少差が見られるものの、からだの（身体運動的）側面、あたまの（認知的）側面、こころの（社会・情緒的）側面ともに高い期待を持っていました。側面別にみると、こころ>あたま>からだの順で期待する割合が高く、運動や遊びへの重要性の認識は高い一方、こころやあたまといった側面と比べると、若干その重要性は低下する傾向もみられました。

～ 「ひとつの専門的なスポーツ」が望ましいと考える母親が4割も！ ～

Q. 子どもの頃に行う【スポーツ】として、AとB、どちらが望ましいと思いますか？



子どもの頃に行うスポーツとしては、複数種目を行うほうが望ましいと考える母親が61,5%に上りました。一方、ひとつのスポーツ種目を専門的に行うほうが望ましいと考える母親は38,5%でした。幼少児期の発達段階に見合った運動やスポーツのあり方についての理解が不足している母親も多く存在しているようです。

今回の結果について、調査内容の検討と分析を行った山梨大学准教授の中村和彦先生は「今回は、幼少児を持つ20代から40代までの母親を対象に、『遊び』に関する調査を行いました。幼少児にとって身体活動を伴う『遊び』は、『からだ』『こころ』『あたま』をトータルに発達させる上で非常に重要です。今回の調査結果においても、遊びの重要性を理解している母親が多く存在していました。しかし一方で、『専門的なスポーツによって運動能力が高まる』『学力（あたま）とコミュニケーション（こころ）の育ちは遊びに関係しない』『今の子どもは、遊び時間、遊び空間、遊び仲間に恵まれている』と考えている母親の存在も明らかになりました。子どもたちが、こころ豊かに、健やかに育っていくために、母親が子どもの育ちと現状についてのリテラシーを高め、認識を深めていくことが重要であると思います」とコメントしています。

### 【中村和彦 プロフィール】

1960年山梨県生まれ。山梨大学人間科学部准教授。専門分野：発育発達学、運動発達学、健康教育学。

日本発育発達学会理事及び機関誌編集委員、日本体育学会代議員及び機関誌・国際機関誌編集委員。

文部科学省中央教育審議会スポーツ・青少年分科会スポーツ振興に関する特別委員会委員、文部科学省小学校学習指導要領解説体育編作成協力者、(財)日本体育協会ジュニアスポーツ指導員部会部会長、(財)日本レクリエーション協会子どもの体力向上推進事業プロジェクトチーフ、日本トップリーグ連携機構「ボールであそぼう」プロジェクトチーフ、NHK教育番組「からだであそぼ」「あさだ！からだ」監修など。

「子どものからだは危ない！」(日本標準)、「元気アップ！健康12ヶ月」(日本標準)など著書多数。

### 【ボーンエルンドについて】

ボーンエルンドは、“あそびの道具と環境”を提供することを通じて子どもの健全な成長に寄与するため、1981年に設立。一般家庭向け、子どもの成長に必要な生活道具としての“あそび道具”を提案、全国約80カ所で直営店舗を運営しています。また同時に幼稚園や保育園、公園などに高品質な大型遊具や教育道具の提供を含めたあそび環境の開発を行っており、現在までに手掛けた実績は国内約3万カ所まで拡大しています。

#### 報道関係の方のお問い合わせ先

株式会社プラップジャパン

担当：古澤、山口

TEL：03-3486-6868

E-mail：bornelund@ml.prap.co.jp

株式会社ボーンエルンド 広報

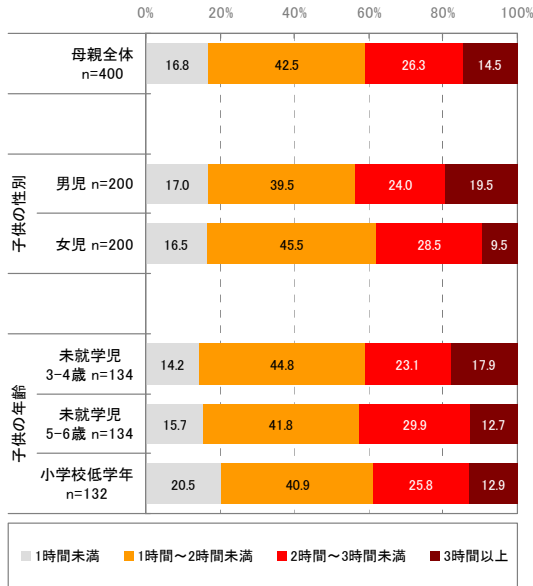
担当：村上

TEL：03-5785-0860

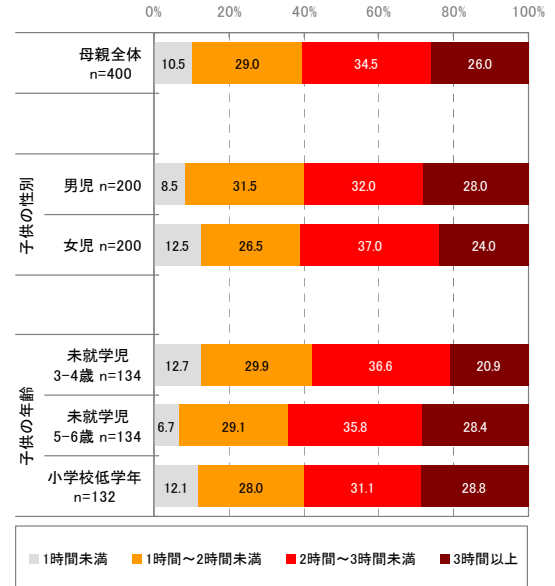
E-mail：y-murakami@bornelund.co.jp

【 参考：その他調査結果 】

Q. 平日、一番下のお子様は、テレビをどのくらいご覧になっていますか。1日の平均時間でお答えください。

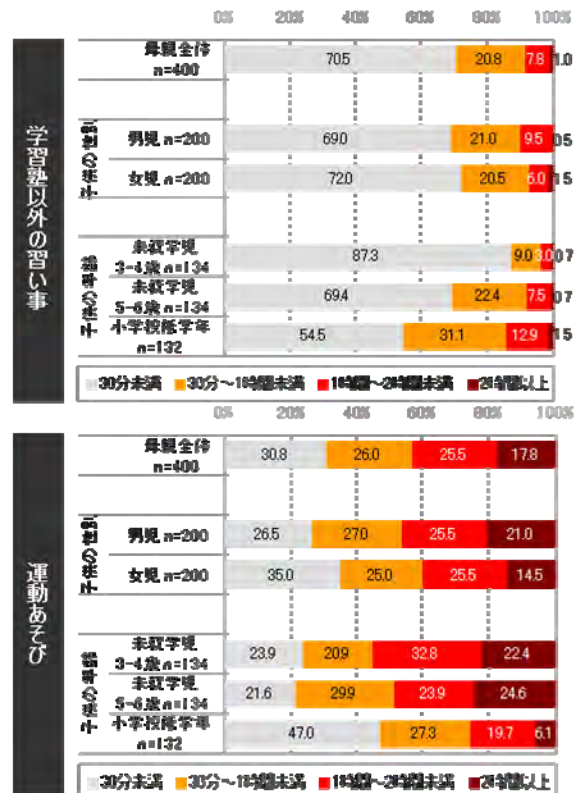
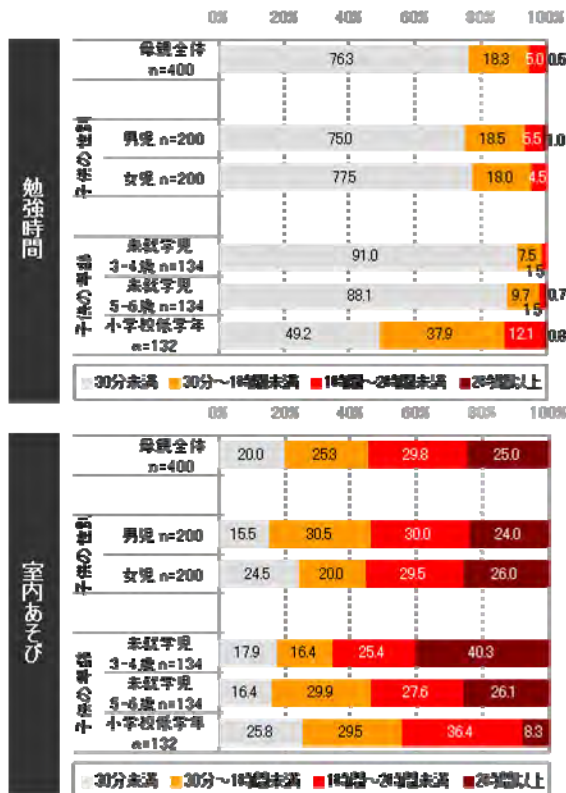


Q. 休日、一番下のお子様は、テレビをどのくらいご覧になっていますか。1日の平均時間でお答えください。



平日は83.3%の子どもが1時間以上テレビを鑑賞し、40.8%の子どもが2時間以上テレビを鑑賞していました。休日は89.5%の子どもが1時間以上テレビを鑑賞し、60.5%の子どもが2時間以上テレビを鑑賞していました。いずれも年齢、性別で大きな差は見られませんでした。

Q. 平日、一番下のお子様は、以下の事柄をどのくらいしていますか。1日の平均時間でお答えください。

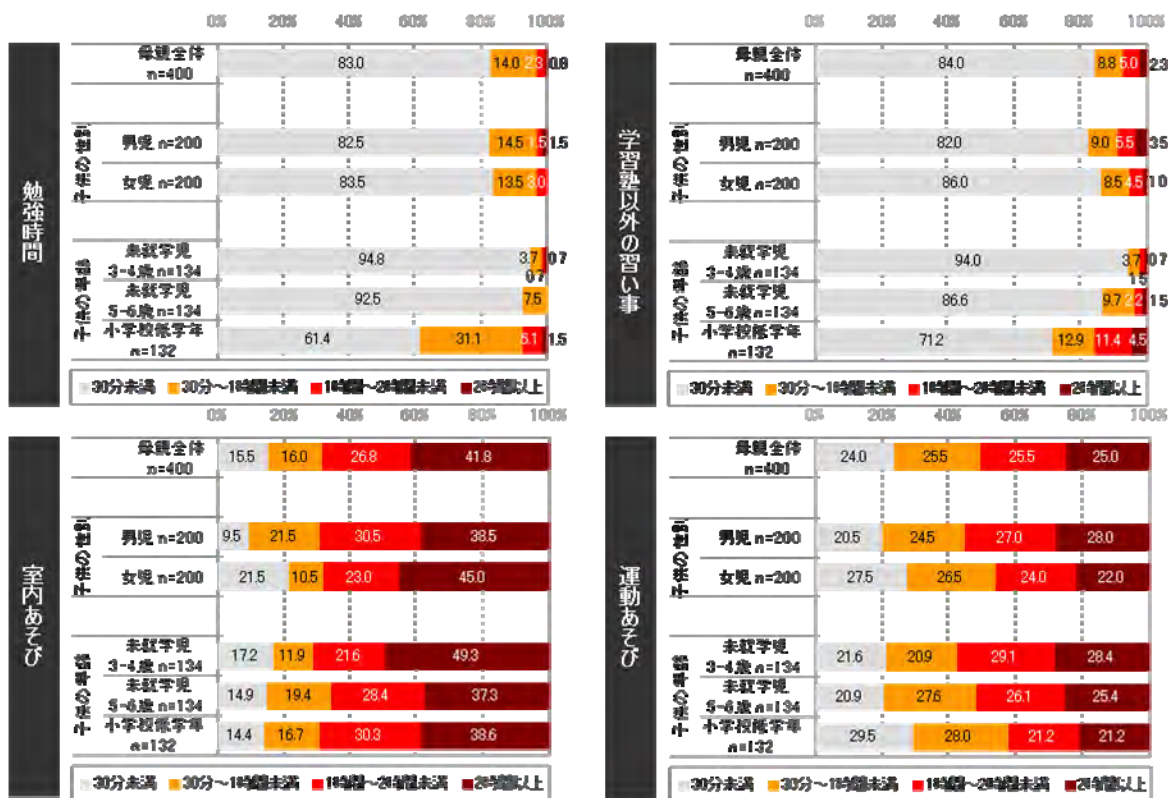


勉強時間・習い事の時間については、小学校低学年になると時間が増加する一方で、室内遊びや運動遊びの時間が減少する傾向がありました。

また、運動遊びと室内遊びにおける1時間以上の割合を比較すると、室内遊びの割合のほうが高いことが分かりました。



Q. 休日、一番下のお子様は、以下の事柄をどのくらいしていますか。1日の平均時間でお答えください。

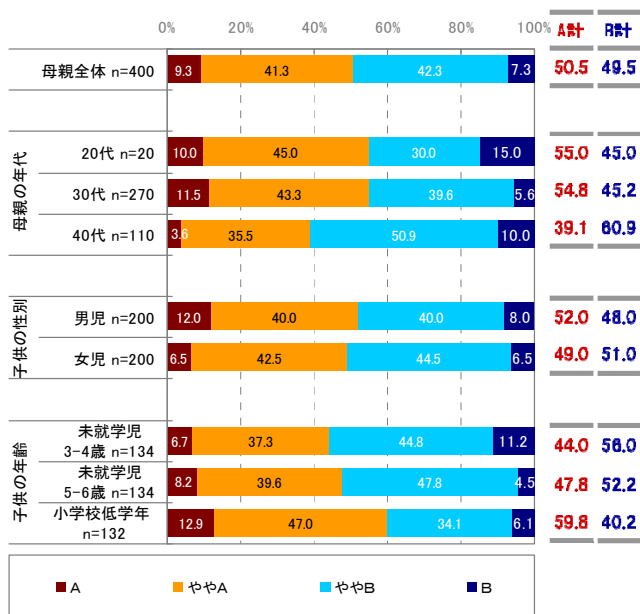


勉強時間・習い事の時間については、小学校低学年になると増加する一方で、運動遊びの時間が減少する傾向がありました。しかし、室内遊びの時間については、さほど変化ありませんでした。

運動遊びの時間の割合と室内遊びの時間の割合を比較すると、室内遊びの時間割合のほうが高いことが分かりました。

Q. 子どもの頃に入る【スポーツ少年団やスポーツクラブ】として、AとB、どちらが望ましいと思いますか。

- A: ひとつのスポーツ種目を専門的に実施するスポーツ少年団やスポーツクラブが望ましい
- B: 複数の種目を経験できるスポーツ少年団やスポーツクラブが望ましい



望ましいスポーツ少年団やスポーツクラブについての質問では、ひとつのスポーツ種目を実施するスポーツ少年団やスポーツクラブに入る方が望ましいと考える母親と、複数の種目を経験できるスポーツ少年団やスポーツクラブに入る方が望ましいと考える母親の割合はほぼ同じでした。